

昭和五十六年六月

蟹江町歴史民俗資料館

年報

第二冊

蟹江むかし物語(二)……………小杉 正 (1)

蟹江のむかし(その二)……………橋本 雅 司 (26)

郷土「かにえ」を知ろう……………中西 進 (30)

蟹江城の戦い……………武田 茂 敬 (38)

「第四十九学区蟹江学校

学務委員奉職中諸雑記」について……………長尾 英 彦 (67)

蟹江むかし物語 (二)

小杉 正

一、はじめに

先回は日本の初めから、平安時代の終わりごろまでの蟹江町のようなすを、「源氏島」にちなんで書いた。今回も、また、「蟹江町史」に書かれていない「織田信長の長島攻め」をとりあげて、この時、蟹江の人々がどんな動きをしたか探ってみたい。

この場合も、史資料が少ないので、想像や推察を加えて、物語風にならざるを得ないが、できるだけ正しい根拠に基づいて話を進めたい。

歴史の中で、戦争の場合、どちらが「正義」であるかはむずかしい問題である。戦争を起こす側は必ず自分たちの方が正しいから、武器をとって立ち上がるのだと主張するだろうし、もう一方は、攻撃されたから、やむを得ず自衛のため戦うのだと強調するだろう。

そして、戦争に勝った方は、自分は正義のため戦った

と歴史に書いて来た。そのため、権力や戦力におしつぶされた「敗者の側」の願ひも正義も、歴史の中では目の見ずに抹殺されるのが普通であり、ひどい時には、史資料だけでなく、人々までことごとく地球上から消されてしまうこともあった。

信長の長島攻めについて、「長島町史」では、「世間一般に『長島一揆』と言われるが、『一揆』とは支配者に対して被支配者が団結して抵抗することを意味するが、当時、長島は信長の支配下に入っていないのだから、『長島一揆』と言うのは誤りである。」というような意味のことが主張されている。まことにものごとくもなことである。それで、私も、「信長の長島攻め」ということばにしてゐる。

戦国時代に、どうして、一向宗（浄土真宗の一派）徒が、あのような大きな力となり、各地で長い間戦うようになったか。このことを知るために、まず、仏教の流れについて調べなければならぬ。

蟹江城の戦い

武 田 茂 敬

一、はじめに

私がこの戦いを研究しはじめたのは、中学二年の夏休みの歴史の宿題に“蟹江城の戦い”を取り上げてからである。それ以来各地の図書館を訪れ、この地を訪れて古老の方によく話を聞いたり、昭和三十八年に「蟹江郷土文化会」という郷土史研究グループにし「蟹江の戦い」をまとめ上げて発表したりした。蟹江町史編纂委員に推せんされた。後、中世・近世を担当し、とくに蟹江城、蟹江合戦について執筆した。『蟹江町史』が発刊された翌々年の昭和五十年に『蟹江城合戦記』を自費出版をした。

昭和五十三年秋には「蟹江歴史民俗資料館」が完成し一部私の所持する史料も展示されていて、それを見ると苦心した研究、執筆時代を思い出すのである。

今回、蟹江城の戦いについて何か講話をするよう要請

をうけ、再び執筆することにした。批判をいたたくとも今後研究者へ少しでも参考になればとの所存からである。

四度あつた蟹江の戦い

蟹江城の戦いは、伝承とされるものをふくめて四度あつた。年代順にあげてみると、

一、弘治元年（一五五五）八月、駿河の今川義元が岡崎衆

（松平元康）に命じて攻撃、世に云う“蟹江七本槍”

二、永祿二年（一五五九）四月、織田信長が城主渡辺与三郎を攻撃し占領す。

三、永祿四年（一五六一）伊勢の北畠氏の配下の長島城の服部友定が、城主滝川一益を攻撃した。

四、天正十二年（一五八四）六月、小牧、長久手の戦いのうち、蟹江城奪還をめぐって、織田・徳川連合軍と豊臣軍の攻防。

以上四度である。この内(一)と(四)について古記録はもち